

「中動態」に生きる

教育研究所所長 佐伯 胖

動詞の態（voice）には能動態（active voice）と受動態（passive voice）があることは誰もが知っていることでしょう。スル、サセルというのが能動態で、サレル、シテモラウというのが受動態です。実はこれ以外に中動態（middle voice）という動詞の態があることはあまり知られておりませんでした。私は本『研究紀要』第 25 巻の巻頭言で『「自発性」とは何か』という一文で、「自発的」というのは、「自（ミズ）からハジメル」という能動態ではなく、「自（オノ）ずからハジマル」という意味もあること、それが中動態動詞なのだと説明しましたが、今読んでも「よくわからない」一文でした。そこで、今回は、研究所に入所してきた研究員が「教育」といことについての「考え違い」に気づいて、どのように考え直してきたかについての説明で、「中動態」の意味を考えてみることにします。

入所当初の研究員は、なんとか「よい授業」をして、子ども達がみんな生き生きと学ぶようになるにはどんな手立てが良いのかを考えたいという思いでいっぱいでした。ところが研究所に来てみると、子ども一人一人の、そのときその場での「思い」や「願い」を読み取ることに集中するようと言われて、子ども達の活動を「見直して（リフレクションして）いくと、子どもの中にみごとに学びが「自（オノ）ずから生まれ出る」姿が「見える」ようになります。「教育」ということが、「教育する」という能動態動詞ではなく、「教育的瞬間が立ち現れる」ことを「見守る」という中動態動詞だとわかってくるのです。

ここでいう「見守る」は、能動態のスルではありません。「見守るってどうスルことなの？」という能動態で考えると、「ただ見ているだけ？」とワケがわからなくなります。「見守る」というのは、子どもが何か「いいこと、思いついた！」（「いいこと思いつく」のは中動態）といって動き出す瞬間を見逃さないことです。そういう子どもは何か「夢中になって」、いろいろなコトを始めます（それぞれは、まさに「能動的」な活動です）。それを「見守って（中動態的に構えて）いた」教師は、教師なりに「(いろいろ) いいこと、思いついた！」が生まれ、じっとしていられなくなります。教師なりに「やるといいだろうな」と思うことを次々と子どもに提案し、一緒に考えて、子どもにとっても、教師にとっても、「納得できる」こと（かくあるは、かくあるべくしてあること）が実現する—自（オノ）ずから生まれる—というしだいです。

そう考えると、「教育」とは、なにか「スルこと」（能動態的動詞）ではなく、「中動態」だらけの世界に生きること、まさに「中動態」に生きるということなのです。

（※『研究紀要』第 30 巻(第 78 期生論文)の佐伯所長巻頭言）